

「当事者研究はどんな研究なのか」企画主旨

工藤 怜之 (Satoshi Kudo)

東京大学先端科学技術研究センター

当事者研究とは、精神障害等を抱えた当事者の地域活動拠点「浦河べてるの家」で生まれた、一種の自助活動である（と、まずさしあたりは特徴づけておく）。例えば、その誕生となった「研究」の事例は、統合失調症に伴う「爆発」に困っていた当事者が、その困難にどう対処していったらよいかを（仲間とともに）自分で研究しはじめたというものであった。その後、同様の活動は、依存症や発達障害などの幅広い当事者グループに広がり、それぞれの困りごとが研究されている。また、当事者研究ネットワークが組織され、当事者研究全国交流集会在日本各地で開かれるに至っている。（当事者研究を紹介した文献は少なくないが、哲学者によるまとめとしては、石原2013 などがある。）

当事者が自分たちで研究を行うべき理由は、いくつか指摘できる。いわゆる専門家による研究が進んでおらず、当事者の困りごとの解決策が提供されていないこともある。また、専門家の取り組んでいる研究課題が、当事者の解決したい課題とそもそも一致していないこともある。さらに、当事者は研究のためのデータとして自分たちの経験を利用することになるが、その証言は専門家などに信用されなかったり、異常や不道徳として咎められたりする可能性もある。こういった理由から、特にマイノリティにとっては、自分たちの困りごとを自由かつ安全に研究できる場が必要なのである。

当事者研究とは、その起源を考えても、また、典型的な実践グループから考えても、マイノリティ集団が自分たちに特有の困りごとに対処するための自助活動である、と理解して間違いではないように思われる。実際、その特徴が説明されるときには、認知行動療法などと比較されることがある。また、当事者研究に参加することで、何らかの意味で「楽になる」人たちがいるのも事実のようであるし、だからこそ、この活動は様々なグループに広まっていったのだと思われる。精神医療に携わる人々の間で注目を集めているのは、当事者研究のこのような「回復」に寄与しうる側面であろう。

しかし、当事者研究について語られる際には、それとは別に、「研究」の側面が特にアピールされることがある。例えば、精神障害の当事者が自分たちのことを研究することで精神障害に関する新たな知識が得られることがあり、それはときに、専門家たちの知見を覆すことすらある、というわけである。これが正しいとすれば（正しい程度において）、当事者研究は知識生産活動としても重要な意義を認められるはずである。

このように、当事者研究は科学論・認識論の観点から興味を引く実践であるが、しかしながら、それが大学などの研究機関で行われる学術研究と同じ「研究」なのか、当事者研究の「成果」をどう評価すべきかといった問いは、まだ詳しく検討されていない。これは単に、当事者研究の存在が研究者たちにまだよく知られていない、というだけの問題ではない。当事者研究に関する情報発信は増えているものの、その発

信者や受信者は必ずしも学術研究者ではなく、また、彼らの主たる関心はその実践ノウハウや自助的効果にあると思われる。そのため、当事者研究の研究的側面に対する関心を持つ研究者には、その関心に応じて、実践者たちの発信する情報を整理しなおしたり、ときにはそれを各研究領域で流通する言葉に「翻訳」したりしながら、その理解を進めていく作業が要求される。

また、当事者研究がどんな研究なのかを理解することを複雑にする要因として、研究主体と研究対象が同一であることも挙げられる。当事者研究では、研究主体が自分の経験を主観的に記述することがあるため、研究成果のある種の「質」に懸念が持たれる可能性もある。また、さらに興味深いのは、研究の過程において、研究主体（＝研究対象）自身の状態が変化しうること、しかも、主体が何らかの意味で「よくなる」かもしれないことである。「よくなる」ことを研究実践のよい成果だとみなすのであれば、当事者研究の方法論はそのような観点から評価され、改良されていくことになるだろう。この点において、当事者研究はかなり特異な性質を持った研究と言えるかもしれない。

このように、当事者研究の研究的側面に注目しても、まだ十分に明らかになっていないことが残されている。本ワークショップでは、もちろんそのすべてをカバーすることはできないが、当事者研究がどのような研究なのかを明らかにすることを目指したい。熊谷と並木の提題では、当事者研究に参加することで研究主体にどのような状態変化が起こるのかを、経験科学の知見を踏まえながら考察する。他方、工藤と狩野の提題では、当事者研究が研究活動としてどのように営まれ、何を生み出しているかという点について、他の研究活動との比較を通じて検討する。なお、当事者研究に関する研究が、科学基礎論学会という場の参加者諸賢にどのように受け取られるのかにも大いに関心があるので、忌憚ないご意見を賜れば幸いである。

参考文献

石原孝二 (2013) 「当事者研究とは何か その理念と展開」、石原孝二編『当事者研究の研究』、医学書院、11-72